

筑後國府跡

—第 254 次発掘調査報告—



平成 25 (2013) 年 3 月
久留米市教育委員会

序

久留米市は筑後平野の中心付近に位置し、古来より交通の要衝として発展してまいりました。さらに耳納山地の緑と筑後川の水など、豊かな自然に恵まれ、先人達は久留米市発展の礎となる多くの文化を創造し、市内各所にはその足跡である歴史遺産が多く残されています。

また、平成17年2月には周辺4町と広域合併を行い、平成20年4月には中核市となり、現在は福岡県南地域の中心都市として発展しております。

本書で報告する筑後国府跡は、古代の筑後国を統括した行政機関で、現在にいたる久留米市発展の礎となった遺跡です。1961年に始まった発掘調査の成果は、全国の官衙研究に新たな情報を発信し続けています。今回の調査でも、筑後国府が盛行した奈良～平安時代と、その後の中世の遺構・遺物を中心に多くの成果が得られました。

今回の発掘調査とその成果を収録した本書の発行によって、地域の歴史解明、さらに文化財保護の理解や普及、歴史学習等に多少なりとも貢献できれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました大和ハウス工業株式会社久留米支店や関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成25年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、宅地造成に先立ち大和ハウス工業株式会社久留米支店の委託を受けて実施した、筑後国府跡第254次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の神保公久が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、神保・田中樹子・檜原初美・藤木幸子・丸山 幸・渡辺しげ子が行った。また、本書に掲載した遺物の実測は、非常勤職員の米澤美詠子が行い、図面の浄書は神保と米澤が実施した。
4. 本書に掲載した遺構写真は、マミヤRB67を用いて6×7判で神保が撮影し、遺物写真はマミヤRB67を用いて6×9判で文化財保護課の塚本映子が撮影した。また、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（旧座標系）を基に作成し、図面の方位は座標北を示す。
6. 本調査の略記号はTKH254、調査番号は201214である。
7. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
8. 遺物観察表の凡例は下記のとおりである。
口径（長）・底径（幅）・器高（厚）の単位はcmである。（ ）内の数値は現存または復元値を示す。
色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1997年版）による。
登録番号は、久留米市市民文化部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。
9. 本書の執筆・編集は神保が担当した。

本文目次

I. はじめに	1
II. 筑後国府跡の立地と概要	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	13

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、宅地造成に伴う事前の発掘調査である。平成24年5月7日、大和ハウス工業株式会社久留米支店より久留米市東合川町字上123-1外における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である筑後国府跡（『福岡県遺跡等分布地図』030112番）に含まれる。周辺では、東側隣接地を昭和53年度の第19次調査、昭和60年度の第65次調査、平成7年度の第128次調査、南東側を平成17年度に第205次調査として発掘調査しており、8～11世紀に及ぶ官衙群が検出されている。特に11世紀前半～中頃には四面庇建物のS B 3036、孫庇または周囲に柵列を巡らす大規模な四面庇建物のS B 3034、その東側にS B 3031、後方にS B 757などが配置された状況が確認されている。このような状況の中、今回の対象地においても多くの遺構が検出される可能性が高いことが想定され、造成地内の道路建設予定地について発掘調査が必要である旨を回答した。協議の結果、調査費用を原因者負担とし、委託者から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成24年6月28日に大和ハウス工業株式会社久留米支店と久留米市長檜原利則は「筑後国府跡第254次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。現地調査は、平成24年7月2日から8月30日に実施、報告書作成まで含めた契約期間は平成25年3月31日までである。

2. 調査に係わる体制

調査委託：大和ハウス工業株式会社久留米支店

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部 部 長：辻 文孝 次 長：佐藤光義

文化財保護課 課 長：古賀正美

課長補佐兼課主査：宮崎俊一 課長補佐：園井正隆

課 主 査：白木 守 辻 義則 庶務担当：豊福早苗

調査担当：神保公久 整理担当：米澤美詠子

発掘調査臨時職員

執行弘子・高尾春代・田中樹子・永富敏明・檜原初美・藤木幸子・丸山 幸・迎 直樹

由布幸子・渡辺しげ子・渡辺やつ子

発掘調査整理臨時職員

五反田真美

II. 筑後国府跡の立地と概要

1. 地理的環境

筑後国府跡の位置する久留米市は、九州最大の穀倉地帯である筑後平野の中央に位置し、交通の要衝として発展してきた。筑後平野の南側には耳納山地が連なり、その西端には延喜式内社である高良大社が鎮座する高良山（312.3m）が聳える。ここから北西に派生する低位段丘上に筑後国府跡は立地し、東西 1.0 km、南北 0.7 km 程度の範囲に展開している。現在の久留米市街地の東方約 1.6 km 付近である。筑後平野には阿蘇外輪山に源を発した筑後川が西流し、久留米市付近で南西に方向を変え有明海に注ぐ。筑後国府跡の北側には筑後川が流れ、国府の選地は筑後川の水運と地理的立地の利便性に起因しているものと考えられる。国府の立地する枝光台地の南端には、水縄断層系千本杉断層が東西に延びており、この断層によって形成された断層崖下には湧水がいくつも見られる。国府の西側は高良山南麓に源を発した高良川が北流し、東側には中谷川が流れ、北の筑後川と南の断層崖によって、筑後国府域は画されている。



第1図 筑後国府跡の位置と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

1. 筑後Ⅰ期政庁 2. 筑後Ⅱ期政庁 3. 筑後Ⅲ期政庁 4. 筑後Ⅳ期政庁 5. ヘボノ木遺跡
6. 筑後国分僧寺跡 7. 筑後国分尼寺跡 8. 高良山神籠石 9. 神道遺跡 10. 下見遺跡
11. 高隆寺跡 12. 西小路遺跡 13. 祇園山古墳 14. 二本木遺跡 15. 第254次調査地

2. 筑後国府の概要

筑後国が成立する以前の7世紀中頃、枝光台地西部分の逆台形を呈する台地を囲むように、大溝や土塁が造営され、内部には多数の掘立柱建物群が営まれた（前身官衙）。高良川河畔の古宮地区には、筑後国が成立した7世紀末から8世紀中頃にかけて、築地塀で囲繞された掘立柱建物群からなる政庁が営まれている（Ⅰ期政庁）。その後、九州において律令体制が安定した8世紀中頃には、古宮地区から東へ約200mの阿弥陀地区に政庁が移転した。このⅡ期政庁は南北75m、東西67.5mを築地塀で囲繞し、9世紀前半には礎石建物に建て替わっており、西脇殿や政庁南前面の朝集殿的な建物群、政庁を囲繞する築地塀、大量の古瓦などが検出されている。この時期、政庁に付属する官衙群は枝光台地一帯に広がり、各官衙はそれぞれの単位毎に計画方位をもって造営される。特にⅡ期政庁南東の浅い谷を挟んだ約200m付近には、9世紀代の国司館跡も確認されている。Ⅱ期政庁は10世紀前半に火災により焼失したと思われる、東へ約600mの朝妻地区に再び移転した。このⅢ期政庁は、幅約4mの大溝で区画された1辺約140mの区画を有し、内部では大規模な掘立柱建物群が検出されている。付属官衙群も併せて移動したと考えられ、政庁の東側を中心に多数の官衙群が確認されている。さらに11世紀後半には南東約400mの横道遺跡へ移転したと考えられており（Ⅳ期政庁）、『高良記』にいう「今ノ符」と目されている。

第1表 筑後国府跡の変遷

	所在地	存続年代
前身官衙	久留米市合川町枝光台地一帯（中枢部：田代地区）	7世紀中頃～7世紀末頃
Ⅰ期政庁	合川町古宮地区	7世紀末頃～8世紀中頃
Ⅱ期政庁	合川町阿弥陀地区	8世紀中頃～10世紀中頃
Ⅲ期政庁	朝妻町三丁野地区	10世紀中頃～11世紀後半
Ⅳ期政庁	御井町横道地区	11世紀後半～12世紀後半



第2図 筑後国府跡第254次調査区全景（南上空から）

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の目的と経過

調査地は、筑後国府跡Ⅲ期政庁の北西約 220 m 付近に位置する。前述したように周囲においては、第 19・65・128・133・205 次調査が実施されており、これらの調査では、8～14 世紀代を中心に多くの遺構・遺物が検出されている。特に東側に隣接する第 19・128 次調査地では、8 世紀後半～9 世紀代の官衙群、11 世紀前半～中頃の官衙群または館と考えられている建物群が検出され、筑後国府域に直線敷設された官道の北側に広がる付属官衙の様相が把握されている。今回はその西側隣接地にあたるため、関連遺構の広がり



第3図 作業風景（東から）

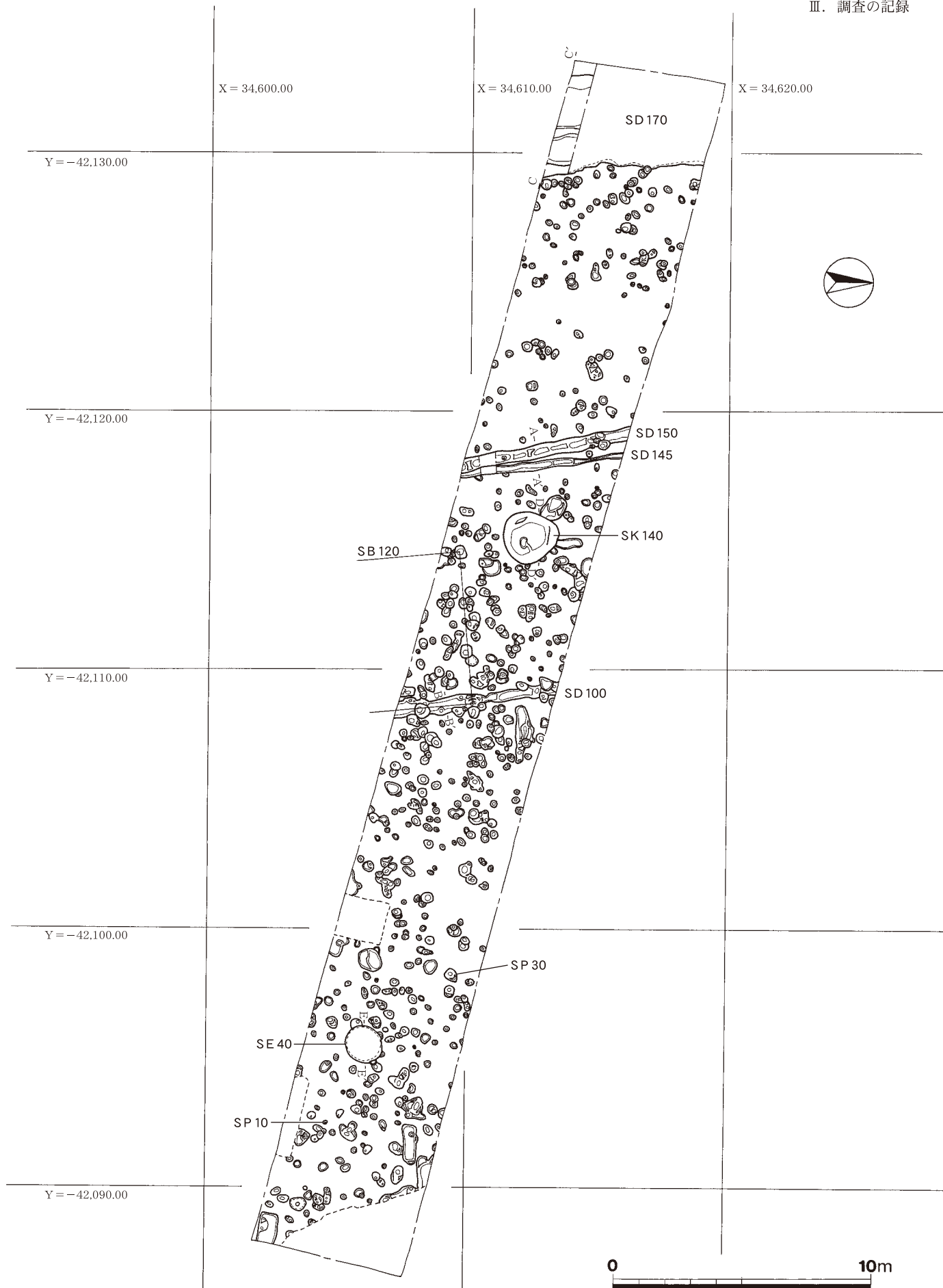
確認できるものと思われた。また、調査地の西側の市道は、現在の町名であるが合川町と東合川町の町境となっており、字境でもある。このことから古代や中世における何らかの遺構状況が関係しているかもしれない、今回はこれらの事を念頭に置き、各時代の遺構群の広がりを確認することを目的として調査を行った。

現地調査は、平成 24 年 7 月 2 日に重機による表土剥ぎから開始した。表土剥ぎに 3 日間程度を要したが、表土を除去した部分から作業員により遺構検出を実施した。その後、平板測量による略図を作成し、終了した箇所より遺構掘り下げを開始した。遺構実測、写真撮影を並行して行い、全ての掘り下げ終了後に全体写真を撮影した。補足調査終了後に埋め戻しを行い、平成 24 年 8 月 30 日に全ての現地作業を終了した。個別遺構図と土層断面図（S = 1 / 10）は手測りで作製し、それ以外の遺構実測はトータルステーションを用いて行った。その記録は株式会社 CUBIC 製ソフト「遺構くん Cubic」で編集・保管している。遺構の記録写真は、全体写真以外を神保がカラーリバーサル・モノクローム 6×7 判で撮影した。

2. 検出遺構

本調査地の周辺地形は、南東から北西側へ緩やかに傾斜している。対象地は水田として利用されてきたが、耕作に伴う配水施設や導水管埋設による攪乱が調査区の東側で認められた。その他は、比較的遺構の残存状況は良好であった。基本土層は調査区西側において耕作土が約 0.3 m、黒褐色の遺物包含層が約 0.2～0.4 m、暗褐色土の遺物包含層が約 0.15 m であった。遺構検出面である地山面までの深さは、調査西側で約 0.6 m 程度、東側では約 0.4 m 程度であり、検出面の標高は西部分で約 12.4 m である。

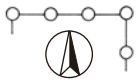
検出遺構は、掘立柱建物 1 棟、溝 4 条、土坑 1 基、井戸 1 基、ピットなどであるが、ここではこれら主要遺構について報告する。



第4図 筑後国府跡第254次調査遺構配置図(1/200)

掘立柱建物

S B 120



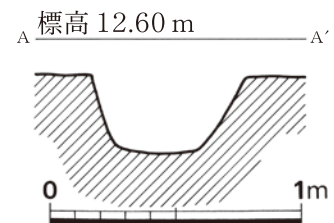
S B 120

調査区の中央部分、南壁沿いで検出した。北側柱列が3間分（西より柱間2.0 m + 1.9 m + 2.0 m）、東側柱列が1間分（2.0 m）検出できており、南・西側柱列が調査区外に広がるために全容は不明であるが、おそらくは東西棟建物と思われる。桁行3間 × 梁間2間程度の建物と推定される。柱穴の平面形は不整形を呈し、長軸長は0.45～0.6 m、柱痕径は確認できたもので0.2 m程度である。埋土は黒色系の砂質土に黄褐色系の砂質土が若干混入する。各柱穴の掘方埋土からは、土師器蓋・坏・皿・埴・甕の細片、須恵器坏・甕の細片、黒色土器A類などが出土している。建物の計画方位はN-5°-Wである。

溝

S D 100（第5・6図）

調査区の中央付近で検出した。北壁から南壁へ約6 m分、調査区を横断する形で検出したものである。重複関係から、前述したS B 120に先行する。上面幅はバラつきが認められ、約0.25～0.65 m程度、中央付近が狭い。底面幅は0.3～0.4 m程度で、断面形状は緩やかなU字形を呈する。深さは0.15 m程度であり、黒色砂質土の埋土からは、土師器坏・埴・甕の細片などの遺物が出土しているが、出土量は少ない。



第5図 S D 100 断面図（1/30）

S D 145（第7・8図）

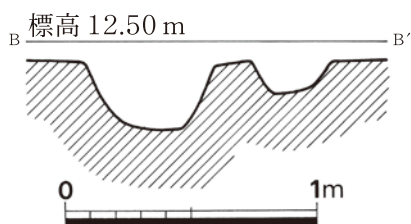
調査区の中央西よりで検出した南北溝である。後述するS D 150に後出する。上面幅0.1～0.3 m程度で、削平を受けている北にかけて狭くなる。底面幅は約0.05～0.2 mを測り、断面形状は緩やかなU字形を呈する。深さは南部分で約0.15 m、北側では数センチメートルしか残存していない。灰褐色砂質土の埋土からは、土師器坏の細片、黒色土器A類細片、越州窯系青磁細片など、ごく僅かな遺物が出土している。



第6図 S D 100 全景（南から）

S D 150（第7・8図）

調査区の中央西より、前述したS D 145と重複して検出した南北溝である。S D 145に先行する。上面幅は約0.5 m程度、底面幅は約0.2 mを測る。断面形状は緩やかなU字形を呈し、深さ約0.25 mを測る。黒褐色砂質土の埋土からは、土師器坏・埴・甕の細片、須恵器甕の胴部片、黒色土器A



第7図 SD 145・150 断面図 (1/30)

類細片などが出土している。

SD 170 (第9・10図)

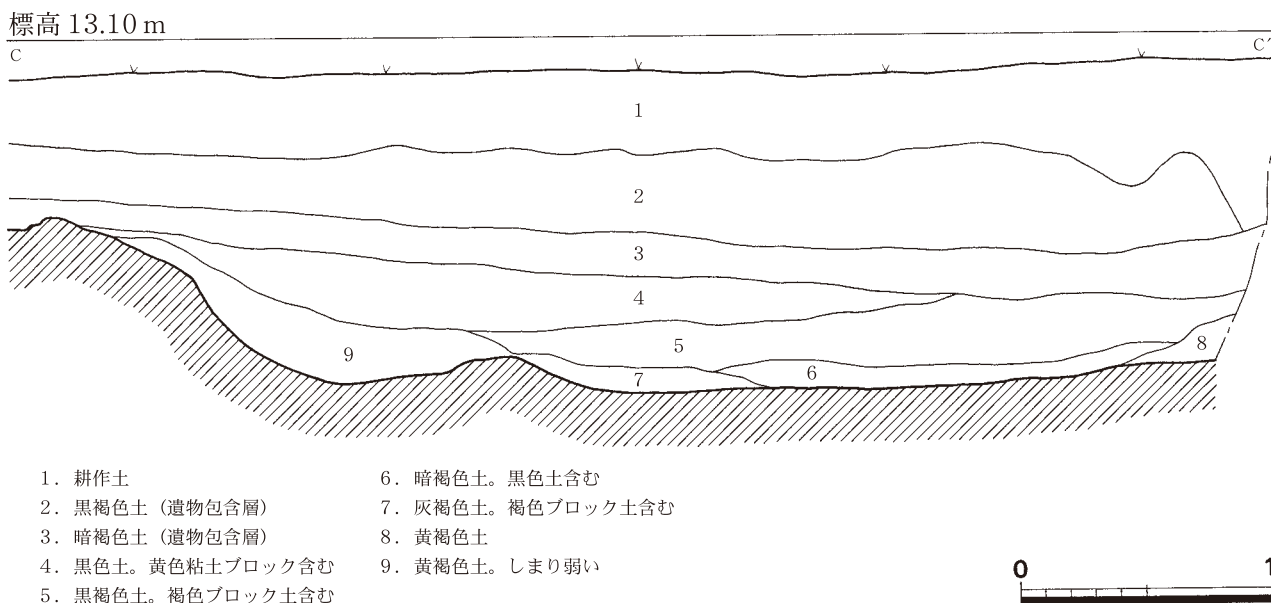
調査区の西壁に沿って検出した。遺構の西側上端は調査区外へ広がるため詳細は不明であるが、南北走行の溝と思われる。前述したように上面幅は不明であるが、南部分に掘削したトレンチでは底面幅が約3.3mと判明しており、上面幅は約5.0m程度になるものと思われる。遺構は緩やかに深くなり、東側が1段高くなるものの、底面はほぼ平坦である。深さは検出面から約0.7mを測る。一部しか掘削していないにも関わらず、埋土からは土師器蓋・坏・皿・埴・甕の細片、須恵器坏・皿・壺・甕の細片、黒色土器A・B類、白磁細片、越州窯系青磁細片、瓦器細片、古など大量の遺物が出土している。



第8図 SD 145・150 全景 (北から)



第9図 SD 170 全景 (北から)



第10図 SD 170 土層断面図 (1/30)

土坑

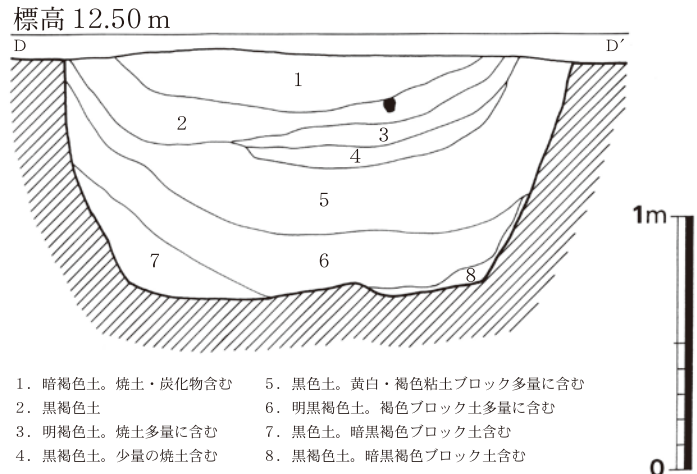
S K 140 (第11・12図)

調査区の中央、やや西より部分で検出した。前述したS B 120の北側に位置する。平面プランは円形に近いが不整形を呈し、長軸長約2.2m、短軸長約2.0mを測る。断面形は逆台形状を呈し、底部はほぼ平坦で、深さは約0.9mを測る。埋土は西側からの堆積が認められ、中位には約0.1mの焼土層が認められた。土師器蓋・坏・皿・埴・甕の細片、須恵器坏・皿・鉢・壺・甕の細片、黒色土器A類などが出土している。9世紀前半の所産と思われる。

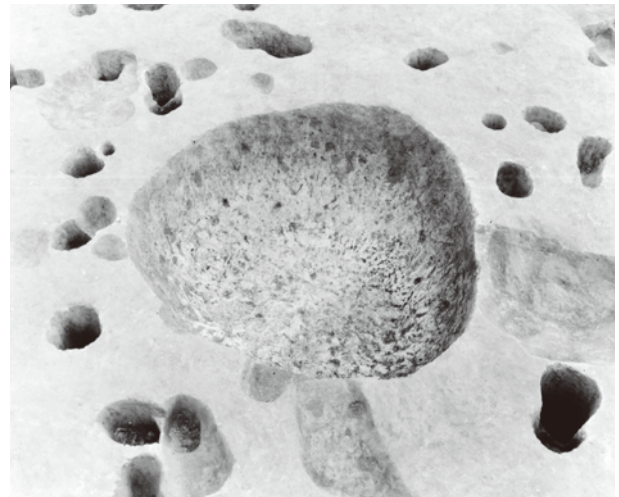
井戸

S E 40 (第13・14図)

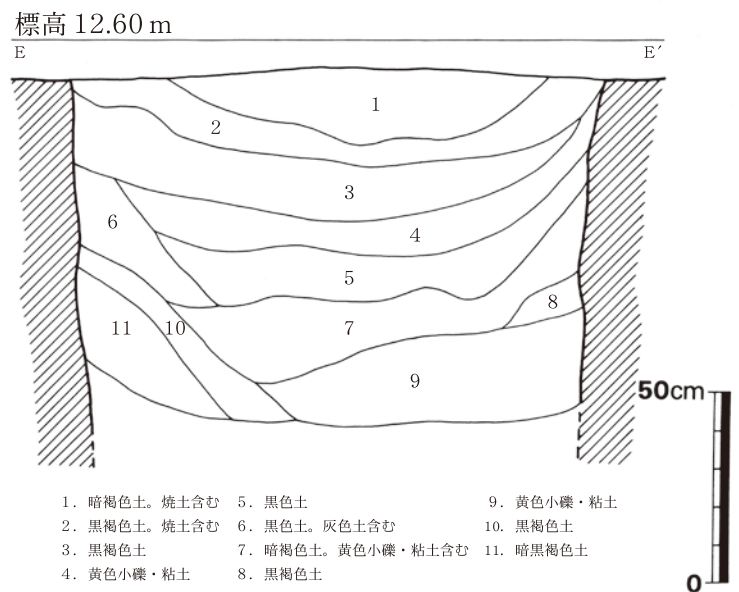
調査区の東部分で検出した。平面形は北東―南西に主軸を採る楕円形を呈する。検出面での規模は、長軸長約1.5m、短軸長約1.35mの規模を測る。約1.4m分を掘り下げたが、壁は徐々に狭くなる。埋土は、第13図に示したように黒褐色土系の砂質土と礫混じりの黄色粘土を主体とし、黒色砂質土を含むものである。出土遺物は埋土の各層から出土し、土師器坏・皿・埴・甕の細片、須恵器蓋・坏・壺・甕・こね鉢の細片、黒色土器A類、瓦器埴細片、緑釉陶器細片、輸入陶磁器（白磁・青磁）細片、古瓦細片などが認められる。跡地利用目的での埋め戻しに伴う混入品であると思われるが、出土遺物の帰属年代から13世紀の所産と考えられよう。



第11図 S K 140 土層断面図 (1/30)



第12図 S K 140 全景 (南から)

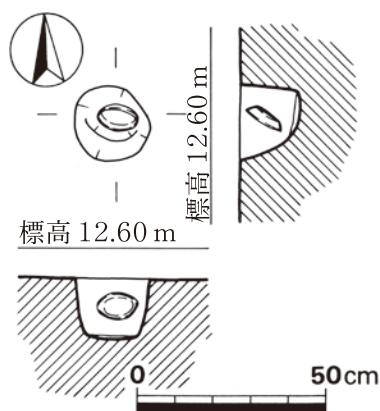


第13図 S E 40 土層断面図 (1/20)

ピット

SP 10 (第15・16図)

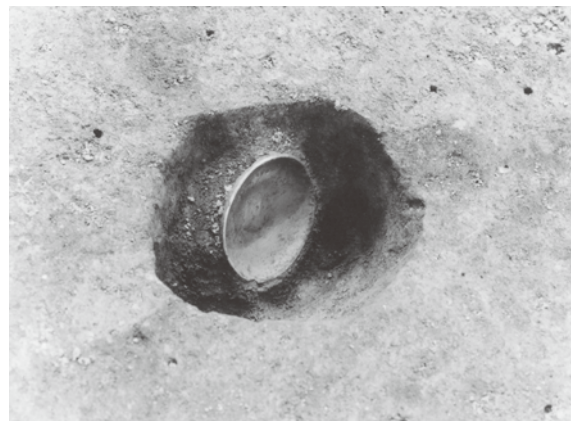
調査区の東部分、前述したSE 40の東側で検出した。平面形は円形を呈し、直径約0.2 m、深さは約0.15 mを測る。内部には、土師器皿が、北側が下位になるように斜め方向に埋設されており、他の出土遺物は皆無であった。地鎮や埋納に関わる遺構である可能性が考えられる。



第15図 SP 10実測図 (1/20)



第14図 SE 40 全景 (南から)



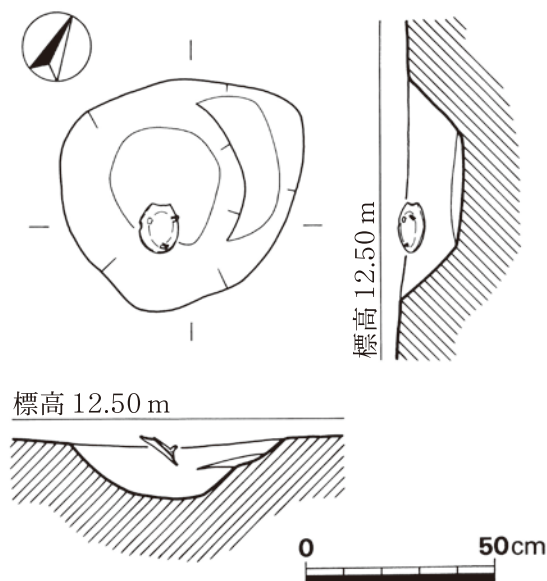
第16図 SP 10 全景 (東から)

SP 30 (第17・18図)

調査区の中央東より、SE 40の北西側で検出した。平面形は、長軸長約0.7 m、短軸長約0.6 mの楕円形を呈し、深さは最深部で約0.15 mを測る。土坑状を呈するが、今回はピットとして報告する。検出面付近から土師器三足皿が出土し、他には土師器坏・皿・甕の細片、須恵器甕の細片、黒色土器A類などが出土している。



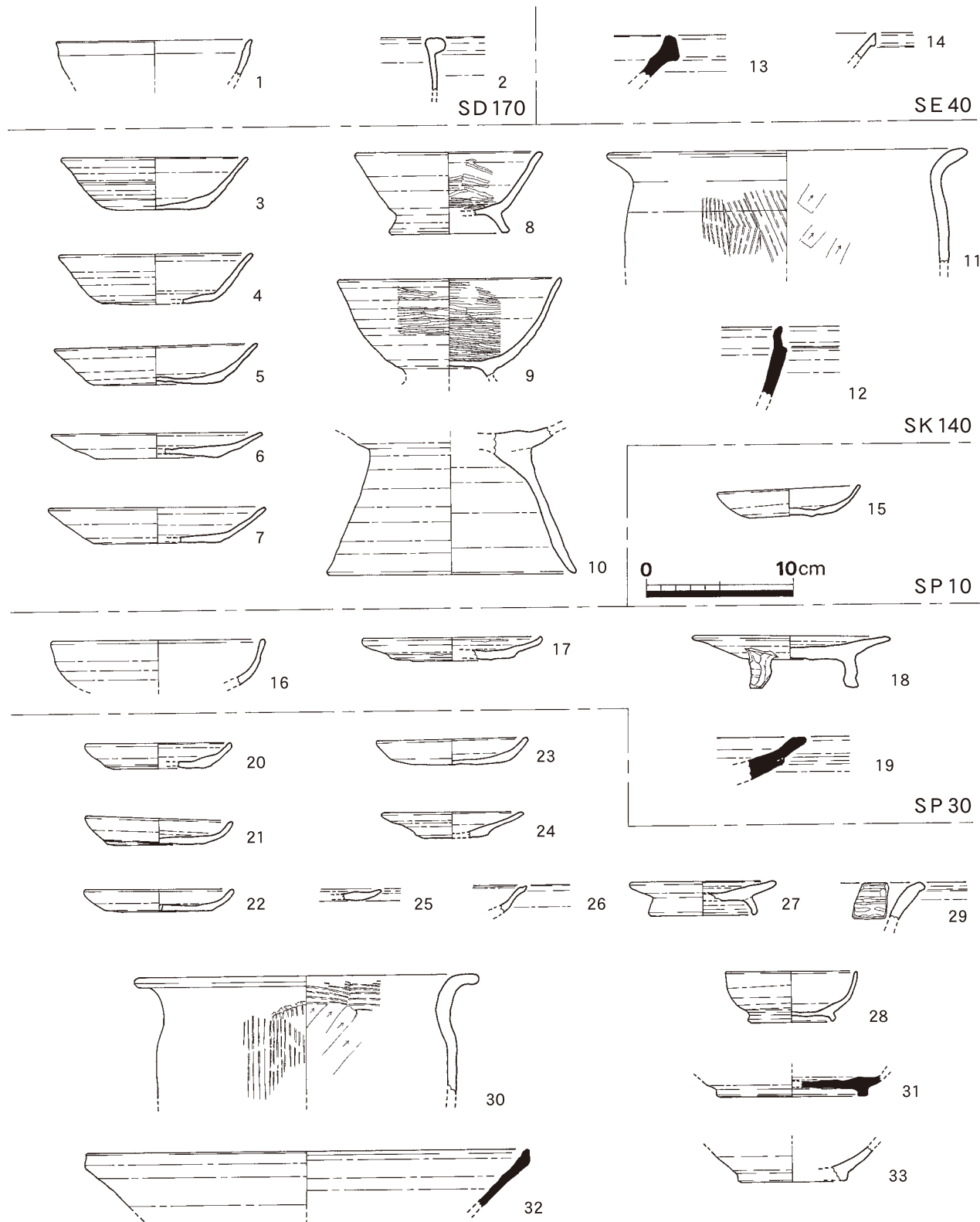
第17図 SP 30 全景 (南から)



第18図 SP 30実測図 (1/20)

3. 出土遺物

今回の調査では、検出面において多くの遺構を検出することができた。各遺構に伴って遺物が出土したが、総量はパンコンテナーに2箱程度である。紙面の都合上、個々の遺物について説明は加えないため、詳細は第2表の出土遺物観察表を参照されたい。



第19図 出土遺物実測図 (1/4)

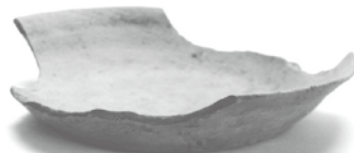
第2表 出土遺物観察表

遺物 No	出土遺構	種 別	器 形	法量			色調		調整		胎 土	備 考	遺物登録番号
				口径 (尺)	底径 (匁)	器高 (匁)	外面	内面	外面	内面			
1 第19図	SD170	白磁	碗	(13.3)	—	(2.6)	灰白	灰白	施釉	施釉	ⅠⅢ珐瑯	Ⅳ類	201214-32
2 第19図	SD170	陶器	長胴壺	—	—	(3.6)	梅暗赤褐～ 暗赤褐	灰褐 に染黄褐	施釉	施釉	精良		201214-31
3 第19図	SK140	土師器	坏	(12.7)	(7.4)	3.6	に染橙 灰黄褐 灰	に染橙～ に染黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	少量の赤色粒子含む	底部に板状瓦痕 外面に黒斑	201214-20
4 第19図	SK140	土師器	坏	(13.2)	8.2	3.4	に染橙～ に染褐	に染橙 黒	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良	内面に黒斑物質	201214-26
5 第19図	SK140	土師器	皿	13.8	8.9	2.5～2.7	に染橙 浅黄褐 暗灰	に染橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	ⅠⅢ珐瑯		201214-27
6 第19図	SK140	土師器	皿	(14.4)	(8.2)	1.7	に染黄褐 に染黄 灰赤	に染橙 に染黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色粒子、輝石など含む	底部に板状瓦痕	201214-22
7 第19図	SK140	土師器	皿	(14.8)	(8.7)	2.4	に染橙	に染橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	少量の赤色粒子含む		201214-23
8 第19図	SK140	黒色土器A類	埴	(12.8)	(8.2)	5.6	に染橙～ に染黄橙 暗灰	暗灰	回転ナデ 回転ヘラケズリ	ミガキ	ⅠⅢ珐瑯		201214-28
9 第19図	SK140	黒色土器A類	埴	(15.3)	—	(6.7)	に染橙 褐灰	灰	ミガキ 回転ヘラケズリ 回転ナデ	ミガキ	ⅠⅢ珐瑯		201214-25
10 第19図	SK140	土師器	高高台坏	—	(16.9)	(10.1)	灰～暗灰 に染黄橙	に染黄橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子含む		201214-21
11 第19図	SK140	土師器	甕	(24.6)	—	(7.8)	に染橙	に染橙 に染黄橙	回転ナデ 刷毛目	回転ナデ ケズリ	多量の彩粒 (石英、長石、角)		201214-24
12 第19図	SK140	須恵器	鉢?	—	—	(4.8)	灰オリーブ 灰白 に染黄褐	灰 に染黄褐	回転ナデ	回転ナデ	黒色粒子含む	外面に自然釉	201214-29
13 第19図	SE40	須恵器	こね鉢	—	—	(2.9)	灰	灰	回転ナデ	回転ナデ	ⅠⅢ珐瑯		201214-10
14 第19図	SE40	白磁	細片	—	—	(1.8)	灰黄	灰白	施釉	施釉	黒色粒子ふくむ	XⅠorⅣ類 玉縁口縁	201214-11
15 第19図	SP10	土師器	皿	9.7	6.7	1.7～2.2	に染橙 に染黄橙 黒	に染橙 橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	少量の赤色粒子含む	外面に黒斑	201214-2
16 第19図	SP30	土師器	坏	(14.6)	—	(3.1)	橙	橙	回転ナデ	回転ナデ	赤色粒子含む		201214-4
17 第19図	SP30	黒色土器A類	皿	(12.2)	(8.5)	1.6	橙 に染黄橙	黒	回転ナデ ヘラ切り	ミガキ	赤色粒子含む		201214-6
18 第19図	SP30	土師器	三足皿	(13.5)	(7.5)	3.5～3.7	に染橙 に染黄橙	橙 に染橙	回転ナデ ケズリ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色粒子含む	脚欠損	201214-7
19 第19図	SP30	須恵器	二重口縁壺	—	—	(2.9)	暗灰	暗灰	回転ナデ	回転ナデ	少量の彩粒(石英、石英など) 含む		201214-5
20 第19図	SP102	土師器	皿	(10.0)	(6.1)	(1.8)	に染橙	に染橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	精良		201214-15
21 第19図	SP30	土師器	小皿	10.0	6.7	1.6～2.0	橙～に染橙 に染黄橙	に染橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	少量の赤色粒子含む	内面に門歯痕 底部に板状瓦痕	201214-36
22 第19図	SP17	土師器	皿	(10.2)	(7.4)	1.6	橙	橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色粒子含む	底部に板状瓦痕	201214-3
23 第19図	SP108	土師器	皿	10.4	8.2	1.7～1.9	橙	橙～に染橙 褐灰	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	赤色粒子含む		201214-16
24 第19図	SP45	土師器	皿	(9.6)	(5.0)	2.0	に染橙～ 灰褐	灰黄褐 に染橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	青陵		201214-12
25 第19図	ST5	土師器	皿	—	—	(0.8)	に染橙	に染橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	少量の赤色粒子含む	内面に化粧土	201214-1
26 第19図	SP179	土師器	皿	—	—	(1.9)	灰褐	灰褐	回転ナデ	回転ナデ	精良	京都系土師器か	201214-34
27 第19図	SP30	土師器	托	(10.0)	(7.4)	2.3	に染橙	に染橙	回転ナデ	回転ナデ	微量の赤色粒子含む		201214-35
28 第19図	SP30	土師器	埴	9.0	6.0	3.5	に染黄橙	に染橙 に染黄橙	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	赤色粒子含む	底部に板状瓦痕	201214-37
29 第19図	SP92	黒色土器A類	甕	—	—	(2.5)	に染橙 灰 黒	黒	回転ナデ	ミガキ	少量の彩粒(石英など) 含む	外面に煤	201214-14
30 第19図	SP36	土師器	甕	(23.6)	—	(8.3)	に染橙 に染褐 黒	に染橙～ 灰褐	回転ナデ 刷毛目 ケズリ	回転ナデ 刷毛目 ケズリ	多量の彩粒(石英、石英、黒曜石 など)含む	外面に煤	201214-19
31 第19図	SP132	須恵器	坏	—	(10.3)	(1.5)	に染黄橙	に染黄橙	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ ナデ	ⅠⅢ珐瑯		201214-18
32 第19図	SP75	須恵器	こね鉢	(30.4)	—	(3.9)	灰黄褐 灰褐	灰黄褐	回転ナデ	回転ナデ	ⅠⅢ珐瑯	刺播系	201214-13
33 第19図	SP122	緑釉陶器	埴	—	(7.5)	(2.4)	灰黄	に染黄橙	施釉	施釉	ⅠⅢ珐瑯	襷窯か	201214-17

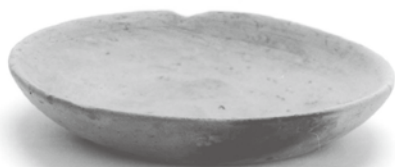
※輸入陶磁器の分類は、太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊XⅤ－陶磁器分類編－』 太宰府市の文化財第49集による。



4



5



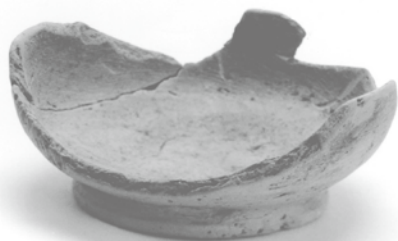
15



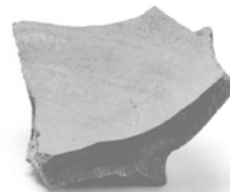
18



23



28



33

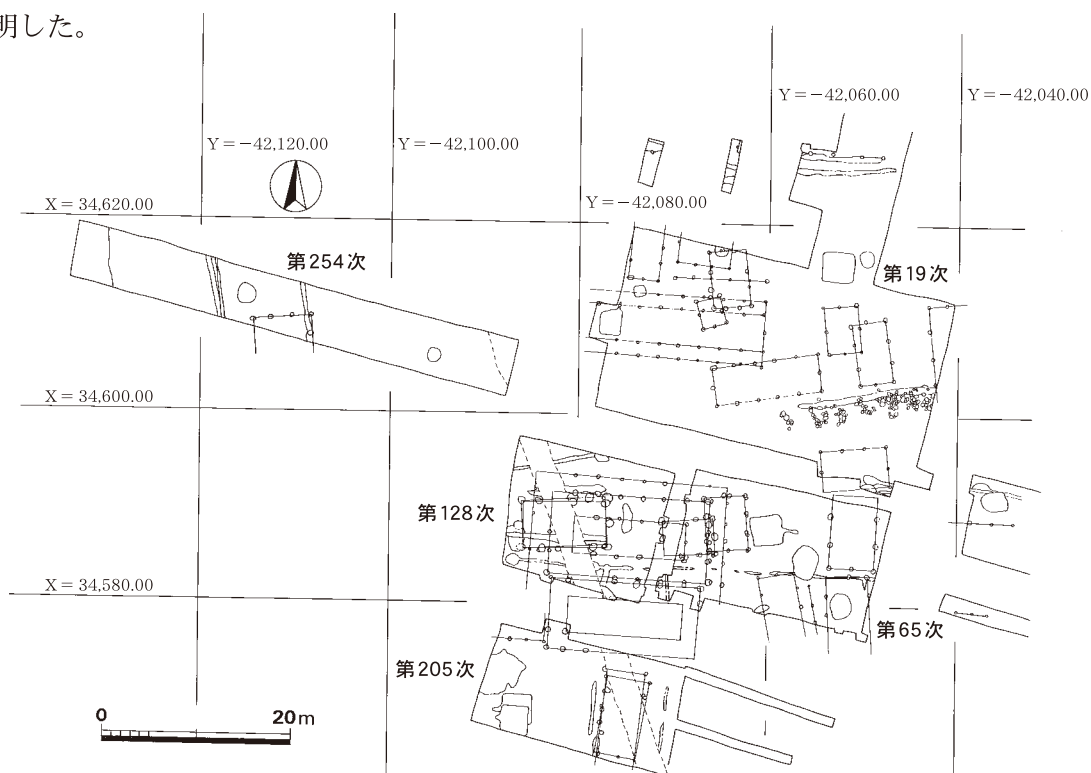
第20図 出土遺物（写真）

IV. 総 括

今回の調査は、宅地造成に先立つ事前の発掘調査で、道路敷設部分について調査を行った。その結果、掘立柱建物1棟、溝4条、土坑1基、井戸1基、ピット群など多数の遺構を検出した。ここでは、周辺の調査成果と合わせて今回の調査で得られた所見をまとめておきたい。

本調査で検出された主要遺構は、大きくは9世紀前半(SK 140)、9世紀中頃～後半(SD 100・145・150、SB 120)、13世紀(SD 170、SE 40)に区分される。SK 140は今回の調査で最も古く位置付けられる遺構で、形状や埋土などから粘土採掘採坑や廃棄土坑の性格が考えられる。続くSD 100・145・150、SB 120は、いずれも西偏5度程度を指向しており、比較的近い年代の所産と考えられる。しかし、重複関係も認められることから、さらに細分が可能であるものと思われる。この時期、上地区では東側に隣接する第19・65・128次調査地付近を中心に、柱筋を揃えた小規模な建物群が検出されている。今回検出した遺構群は、その一角を占める建物と西方を画する施設である可能性が考えられる。SD 170、SE 40は上地区では希少な13世紀代に属する遺構である。第19次調査の南東部付近において若干認められるが、性格等については詳細不明である。今回は大溝ともいえる上端幅約5mのSD 170と、SE 40を検出したことにより、当該期の遺構が比較的広範囲に広がっていることが確認できた。Ⅲ期国庁の移転から100年ほど経過した13世紀代には、地場の有力者層によって国府の故地が搾取され、新たな土地利用がなされていたことを示すものと考えられる。

さて、上地区には、第19・65・128・205次調査において11世紀代の大規模な官衙群が確認されている。筑後国府Ⅲ期政庁に伴う付属官衙、もしくは館と想定されているが、今回の調査では当該期の遺構を検出することができず、11世紀代の官衙群の中心域は調査地付近までは広がらないことが判明した。



第21図 調査地周辺の主要遺構模式図(1/800)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちくごくふあと
書 名	筑後国府跡 ―第254次発掘調査報告―
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第327集
編著者名	神保公久
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9715 Email:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	平成25（2013）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
			市町村	遺跡番号					
ちくごくふあと 筑後国府跡 第254次調査	くるめし 久留米市 ひがしあいかわまち ばんぽか 東合川町 123番1外		40203	30112	33 ° 18 ' 52 "	130 ° 32 ' 43 "	20120702 ～20120830	290㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項		
筑後国府跡 第254次調査	官衙	奈良 ～平安	掘立柱建物	1棟	土師器、須恵器、黒色 土器、瓦器、緑釉陶器 輸入陶磁器、古瓦		筑後国府Ⅲ期政庁の北西約 220m付近を調査。9世紀代の 掘立柱建物や溝・土坑を検出 した。また、13世紀代の溝・ 井戸を検出し、中世における 国府故地の一端を検出した。		
			溝	3条					
			土坑	1基					
	集落	鎌倉 ～室町	溝	1条					
			井戸	1基					
要 約									
第254次調査は、筑後国府Ⅲ期政庁の北西側約220m付近に広がる上地区にあたる。周辺で実施された調査では、8～11世紀に及ぶ官衙群が検出され、特に11世紀前半～中頃には大規模な四面廂建物などが配置された状況が確認されている。今回もその一部が検出されるものと想定された。調査の結果、9世紀代の掘立柱建物1棟や土坑1基、溝3条を検出した。また、13世紀代の溝と井戸1基を検出することができた。周辺の調査成果と合わせると、9世紀代の遺構群は小規模な官衙域や役人の居住域が展開しているものと思われる。13世紀代の遺構群は、国府移転後の当地における、地元有力者の居宅等に関する遺構の可能性が考えられる。									
土木工事の届出日		平成24年7月3日			遺物の発見通知日		平成24年9月3日 (24文財第3180号)		

筑 後 国 府 跡

―第 254 次発掘調査報告―

久留米市文化財調査報告書 第 327 集

平成 25 年 3 月 31 日

発 行 久留米市教育委員会

編 集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印 刷 服部印刷株式会社

久留米市梅満町 410 - 1